

# 平成十年歌会始御製御歌及び詠進歌

道

御製

大学の来しかた示す展示見つつ国開けこし道を思ひぬ

皇后陛下御歌

移民きみら辿りきたりし遠き道にイペーの花はいくたび咲きし

皇太子殿下

一本の杭に記されし道の名に我学問の道ははじまる

皇太子妃殿下

ルワンダへ長くつらなる土の道あゆむ人らに幸多くあれ

文仁親王殿下

赭土のフォーカップへと向かふ道顧頂眼がしばし横切る

文仁親王妃紀子殿下

森ふかき道に見いでし二輪草の小さき花は白くかがやく

清子内親王殿下

道長くひたに来ませり母君のみ背なやさしきあさかげの中

正仁親王殿下

雪つもる毛無峠の道をきて小樽の町の赤き屋根みゆ

正仁親王妃華子殿下

停戦へながき道のりを歩み来しアルスー大統領の手は温かし

宣仁親王妃喜久子殿下

有栖川の流れをくみし身にしあればたゞたどりゆく道のひとすぢ

崇仁親王殿下

悩みつつ踏みまよひつつ八十路越えほの見えてこし新しき道

崇仁親王妃百合子殿下

駅いでて馬ばそり橋はしにのれる雪の道いでゆの町は暮れゆかむとす

寛仁親王妃信子殿下

行く道に黄金こがねしきつめいちやう降る初こがらしの師走のあした

憲仁親王殿下

奥穂高の雲にかくれし頂上をめざしひたすら登る尾根道

憲仁親王妃久子殿下

しづかなる神宮の森すがすがと玉砂利ふみて参道をゆく

召人 橋元四郎平

芽ぶきゆく木末こぬれの空はしづかなり林に入りて道つづくかも

選者 武川忠一

夜道ゆく身をひきしめて冬竹群たかむら高き梢のさやさやと鳴る

選者 安永落子

寒椿あかきに逢へば花恋ひのこころ永劫えこふに朝の道ゆく

選者 岡野弘彦

うら若き母に負はれて越えし山なつくさ深き道に入りきぬ

選者 岡井隆

意外なる方角にふかく道ありて心を誘ふこの二三日

選者 島田修二

道なりにのぼり来れる峠にていまあたらしき富士に真向かふ

選歌 (詠進者生年月日順)

三重県 西山時雨

トロツコを押して造りし遠き日を想ひつつ島の道を歩みぬ

東京都 伊東弘晴

火の如き言葉のこして立ち去りし靴音かなし深き夜の道

秋田県 伊藤順三

草刈りしなはては風の道となりあきたこまちの開花はじまる

香川県 藤堂ハル工

産道を出でしみどり児かき抱き産湯つかはす真夜の勤務に

三重県 小阪典生

一軒家に最後の葉書配り終へ初日耀ふ道を下りぬ

大分県 三代英輔

整へし圃場の道を朝毎に通ひてわれは万の鶏飼ふ

宮城県 窪田碩子

砂浜の砂に迷路のごとく伸ぶ幼の描きし宇宙への道

東京都 福田八重子

この道をまつすぐ行かば届くかと思ふあたりへ春の日昇る

福岡県 吉永幸子

いちにちがきらきらとして生まれ来ぬ海の道ゆく父の背あかるし

大阪府 佐藤美穂

夏空に音は広がりかけろふの揺れる道の辺パレード終る

佳 作 (詠進者生年月日順)

福岡県 江口富士子

自転車をつらねて子らの通ふ道あしたの霜は日にかがやけり

島根県 安部 勝

卯の花の匂ふ坂道登り行きて庵主に出雲風土記を習ふ

新潟県 千野金太郎

鳥渡る空にも道のあるらしき腹しらしらと向きかへ翔ぶは

東京都 村田千枝子

国道のここがさいはてふるさとのサハリン見ゆる道に今立つ

神奈川県 吉田淑子

母となり祖母となりても迷ひ道迷へど喜寿は向ふから来る

鹿嶋県 上村マツエ

国道に車まれなる暁をえらびて夫と稲架竹運ぶ

福島県 渡辺末子

人参の間引きを終へて帰る道野良着に人参の匂ひ残れり

栃木県 桑川ヤス

優しき人に嫁げと言ひて別れたる兄はこの道征きて帰らず

秋田県 高橋恵一

右左に往診鞆を持ち替へて凍てつく雪の峡の道行く

山形県 吉田宏道

夕されば国道のとよみかすかにて冬の嵐の近づくらしくも

岡山県 石井 淳

広島へ歩き続ける一団が火渡りのごと熱き道行く

オーストラリア国  
西オーストラリア州 稲川茂代

フロントガラスに昆虫びしびし当り来る地平線まで直線の道

神奈川県 杉山久子

馴れし道秋晴れ木犀煉瓦塀今日は最後の出勤となる

富山県 大寺美也子

コスモスの野も女童の前髪も吹き分けて行く風の道あり

沖縄県 渡久山春英

道遙か渡るさしばの背見つつわが小型機は追ひ越してゆく

広島県 篠崎洋子

坑道の閉ぢらるる日も幾歳の朝と変はらず夫の起きくる